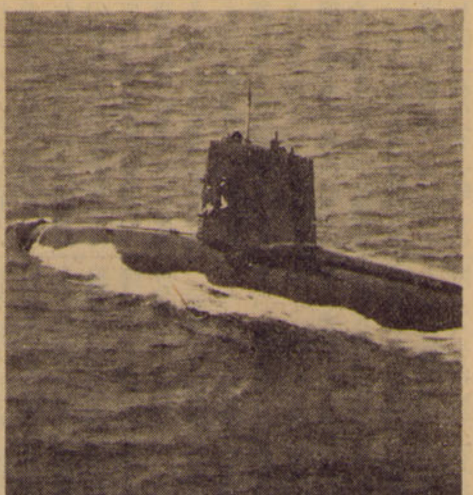
立教大學新聞
発行所
豊島区西池袋三丁目
立教大学新聞学会
© 振替東京 70852
電話(983)0111(代)内線688
発行人　野口定男
毎月十五日発行

出版と印刷
株式会社 表現社
板橋区富士見町三四
電話（九六二）二三九一（代）

米原潜、横須賀に入港！

立ち遅れる阻止闘争



□一昨年一一月、米原子力潜水艦シー・ドラゴン号が、寄港阻止闘争の一定程度の盛り上がりにもかかわらず、佐世保港に入港して以来、計八回の寄港が、阻止闘争の退潮のなかをなしくずし的に行われ、日本国民の核アレルギー懐柔のある程度の成功のうちに、五月三〇日、ついに原潜の横須賀入港が強行されるに至った。日本政府は横須賀入港についても、①日米安保条約に基く日本側の当然の義務であり、②原子炉廃棄物などによる安全性も佐世保で実証ずみで全く心配なく、③原潜寄港によって日本が戦争に直接介入したことにはならない、という見解を発表して、安保条約をタテに、原潜の寄港に極めて積極的な態度を示している。今度入港したスヌーク号はスキップジャック型の高速攻撃用原子力潜水艦で、核爆雷「サブロック」は積まない型といわれるが同艦は佐世保に昨年五月に入港したこともあり、一九六一年就役後、太平洋西海域で軍事行動に従事しているものである□

五月二九日、原潜の横須賀入港が発表されると、直ちに社会党、共産党、学生などによる原潜抗議デモが現地横須賀で連日展開された。学生は二九日に続いて三〇日、六月一日と激しい抗議行動をくり広げたが、三〇日のデモでは、警視庁機動隊を増援しての猛烈な弾圧体制の中で一五〇〇人が臨海公園に結集した。公園を出てから米軍基地ゲート前や京浜急行横須賀中央駅付近で警官隊の弾圧にあって、二六名の学生が頭部などに重軽傷を負い一〇名が不当にも逮捕された。

また六月一日にはふりしきる雨の中を約一、五〇〇人が集まったがこの日も、学生がデモを始めると学生を上まわる数の警官隊が両側からはさみ込み、なぐる、けるの大弾圧を加えた。学生のうち革マル派系は強い横なぐりの雨の中で、ゲート前で約二時間すわり込み、また、都学連系は九時半ごろ、基地正門を突破しようとしたが、警官隊に阻止された。

原子力空母エンタプライズ号の入港が時間の問題となっている現時点において、原潜寄港の意味と、今回も寄港を許してしまった阻止闘争の側の現在的課題は何か。徹底的な総括が今こそなされなければならない。

《関連記事二面へ》

総額15億7300万円

41年度大学予算決る

昭和四一年度立教大学予算がこのほど、理事会によって可決された。本年度の予算総額は一五億七千二百九八万八千円で、昨年度の一三億三千五百五五万三千円に比べ、二億三千七百万円と約二〇%近くの大幅増加を示している。

収入の部をみてみると、授業料での収入の増加が目立つ。これは予算額の約五〇%を占め、また増額面での割合も同等の割合を示している。これは本年度が史上最高の入試であり、これに伴った各学部の大幅定員増加によるものであることは周知の通りである。また昨年度より予算額の減少しているものに学院借入金がある。これは実質的な赤字であるが、この減少について松下総長は「赤字問題については、収入の自然増が見込まれている昭和四三年度までに何らかの克服の目度を立てなければならない。具体的にいえば昭和四〇年度の経常部における借入金二億一千二百万円を限度として逓減してゆき、四三年度でその半分程度に減少させたいのである。できれば、四四年度は借入金なし、という形まで改善したいのであるが、現在の経済状勢の変化に大学の収入が追いついていけるかどうか疑問があるので、一応半減を目度とした。残りの赤字については維持後援会関係の寄付金を充当したい考えである」と述べている。

次に支出の部を見てみると、毎年のことながら人件費の増加が目立つ。昨年度より一〇%の増額であるが、この人件費すなわち給与の引上げについて教職員組合では約三〇%の引上げを要求し、大学当局との間に再三団体交渉がもたれたが、当局の「立教大学の教職員が逃げだすほどに、立教大学の待遇が他の私立大学の平均に比べ非常に悪くなければ、緊急のベース・アップを行う必要がない」との理由によるゼロ回答によって団体交渉は決裂に終っている。このため教職組では再三にわたり、すわり込み集会を開いている。

〔解説〕

まず第一に注目しなければならないのは、二年前に強行された授業料値上げの学生への直接的還元の問題である。昨年度と同様、本年度も何ら明確な方針は打出されていない。育英資金と建設資金積立金が若干増額されているにすぎない。建設資金にしても学生会館及び体育館設立に使用されるという確証はないのである。

次に教職組との間における給与の問題であるが、大学当局は物価手当として一〇・八%（七%プラス一律二千円）支給すると回答したのみで、予算計上後の増収分より人権費を考慮して行くとしている。本年度の予算作成は赤字漸減と人権費の増加という二本の柱をもってなされてきたが、実質的には赤字漸減を前面に強調することによって人件費の増加の面を無視しようとするものに他ならない。このような学生・教職員の勉学、待遇改善を無視した予算の示す方向性は何か。事務機構改革による総長の強権化であり営利会社なみの経営重点主義の維持促進であり、同時に現在の資本主義体制と大学とを連結させる産学協同路線に相応する教育体制確立に他ならないのではないか。大学全体が総長室というコントロールタワーによる統制により、大学を管理運営しようとするものである。それと同時に教授会の権限縮少を図り、そこには教育不在であり、大学というものは存在しないのである。我々は大学予算がこのような方向性を示すことを露呈すると共に、大学の危機という問題を考えるべき時点に来ているのではないか。

昭和41年度大学予算

収入の部　（単位千円）

科目	41年度予算額	40年度予算額
授業料	725,396	576,460
入学金	160,205	137,315
試験料	121,347	103,190
実験実習実技費	6,183	5,426
施設費	153,350	100,180
手数料	1,900	1,400
雑収入	9,000	8,000
前年度繰越金	0	2
国庫助成金	32,461	32,461
学院借入金（不足金）	205,146	212,000
学院借入金（一時運営資金）	158,000	158,000
合計	1,572,988	1,334,434

支出の部

科目	41年度予算額	40年度予算額
給料	440,833	397,305
諸手当	278,610	243,345
恩給基金積立金	20,000	18,451
退職基金積立金	20,190	18,807
厚生費	23,700	18,950
旅費交通費	21,000	14,700
海外出張費	18,000	14,000
研究補助費	30,100	23,635
備品費	39,700	37,100
消耗費	34,440	28,800
実験実習費	5,258	4,406
体育費	2,525	2,620
育英資金	9,000	8,000
学生厚生福利費	3,000	2,500
式典費	300	300
補助費	4,800	4,200
特別講演費	500	100
広告費	7,300	7,000
機関紙発行費	700	700
健康管理費	11,175	11,175
会合費	2,500	1,200
諸会費	1,580	1,080
修繕費	8,050	8,050
清掃費	8,100	8,100
警備費	2,880	1,440
車両費	1,000	1,000
学院経費分担費	35,424	32,119
電話経費分担費	10,264	9,365
損害保険料分担費	1,000	1,025
国庫助成設備	53,455	53,455
グリーンハイツ管理費	6,264	6,264
渉外費	4,300	1,912
雑費	5,000	4,000
建設資金積立	60,000	40,000
借入金返還	212,000	120,000
借入金返還（一時運営費）	158,000	158,000
支払利息	5,040	5,040
機械保守料	13,000	1,080
施設費	11,900	11,900
学生健保補助費	2,500	2,500
職員研修費	4,300	4,130
入試IBM費	3,000	0
予備費	4,000	1,730
合計	1,572,988	1,334,434

論説

思想的次元での総括を

＝四〇年度級委員会総括を検討する＝

四〇年度級委員会活動総括が出た。我々はここで活動総括に検討を加え、自治活動の今後の展望に触れてみたい。

まずこの総括は全般を通じて、『総括』した個所が見受けられぬといっても過言ではあるまい。総括の各所に、「全人民諸階級」の団結と前進が謳われ、指導部の、状勢分析の決定的誤謬によってもたらされた「敗北」が「前進」にすりかえられている。立教大学級委員会の活動が、いかに没主体的で再建「全学連」中心の無批判的活動に終始してしまったかを、この総括が示唆しているのである。全学友の要求をとり上げようとの努力がなされればなされる程、級委員会が一般学友から遊離し、没主体的斗争の当然の帰着である一般学友からの「遊離」の虚しさと自己満足が、総括において、自己批判という操作を回避し、「敗北」を意識的にぼかし、『展望』に結びつけ、おのれの無力さを慰さめているのである。

四〇年度活動の中心は、学食斗争と日韓斗争、それに教育の反動化に対する斗争があげられるであろう。

学食斗争に関して、総括は「六・九斗争と学食斗争との関連が学友の中で明らかにされぬうちに行動をとってしまった為、多くの学友の支持があったにもかかわらず、逆に敵を不明確にし学友の目をボイコット云々の問題に向けさせてしまったことは、常に学友の中に問題を提起し、展望ある方針を作り上げるという点が弱かった」としている。「弱かった」のではあるまい。「敗北」だったのである。学友の目を意識的にベトナム支援に向けさせ、斗争の焦点をぼかし、六・九支持委員会と称して行動した級委員会執行部諸君自身が自からの手で斗争を敗北に導いたのではないか。『ベトナム侵略と日本との関連を明らかにする点で成果を収めた。』との総括は執行部諸君が言うところの「建設的」な総括ではあるまい。敗北は動かし得ぬ事実なのだ。この件に関して委員長は、「責任の一切、大学当局にある。我々は学友に対してのみ責任がある。」という旨の発言をした。しかし総括にはいつ学友に対して敗北の責任をとったのか何ら明記されていない。「全学連」加盟校ゆえに、学食斗争を六・九ベトナム反戦斗争に無理に結びつけねばならなかったのであり、学生食堂に関しての五者協議会という組織を無視し、決定的敗北を喫した点など、二度と誤りをくり返さぬためにもまた、真に建設的な自治会を発展させるためにも、敗北の原因を大衆的に明らかにし、撤底的な討論がなされねばならない。

次に日韓斗争の総括に関して検討してみる。級委員会執行部は、数千部の日韓条約粉砕のビラをまき『消化』したことが、斗いの発展に大きな役割を果たしたとしている。集会に参加した学生の数をもって「前進」としている。確かに、執行部諸君にとっては大量動員は前進かも知れぬ。しかし、それでは斗争における評価が的を射ていないのである。現に日韓条約は成立した。アジビラの『消化』、大量動員の果した役割を安易に「前進」と結びつけてよいものであろうか。斗争において自己がいかに主体的にかかわり、その斗争の過程でいかなる教訓を自己のものとして引き出し得たのかがまさに決定的に重要なのだ。

最後に教育反動化斗争を検討するならば、「全学連」は早稲田斗争において、大学の「財政危機」という発言を何ら疑うことなく、危機という現状を肯定し、国庫補助要求斗争へと運動を展開したのである。終始斗争の本質すら見抜けず、ワキ役しか果し得なかったのである。「全学連」と同一歩調の執行部の支援活動は何の役割を果し得たのであろうか。立教大学においても教育の反動化は「長期計画」にもみられる如く、露骨に進行しつつある。このような状況下にあってこのような欺瞞的な総括で満足していては何らの斗争も組み得まい。一方的なイデオロギーを上から押しつけ統一と団結を勝ちとったところで、その勝利は斗争における勝利と結びつき得ぬのである。

今こそ、安易な馴れ合いムードを脱却し、真に、自治会活動を発展させるために、思想的次元における総括をなすべきなのである。

級委員会総会開かる

昭和四〇年度級委員会総会が五月三一日午後三時三〇分三五一番教室にて、定員一九二、出席六四委任状三五という出席状況のもとに開会された。議題は(一)四〇年度活動報告(二)会計報告(三)選挙規約に関して(四)当面の活動方針の四議題であったが会計報告は後日にまわされ、三議題について質疑応答がなされた。三宅委員長より活動総括が出され主に学食斗争問題が中心に討論された。この時、傍聴者から発言したいとの要望が出され、議事進行を妨げない限りの発言が許された。元、生協問題委員から、学食斗争の誤りが指摘された。この問題に関しては級委員会に対してかなりの批判があったが、時間の都合上という理由で、次の問題に移された。その後、大学をめぐる教育反動化状況、私学助成金問題が出された。この問題に関して社会学部の級委員から緊急報告がなされた。その報告の中で、社会学部のカリキュラムが産学共同路線に偏向されているという注目すべき発言がなされた。その他、級委員会の低調さ、組織論の問題について討論され、九時過ぎ、選挙管理規定を採択して閉会した。

二〇日から投票

級委員選挙

クラス委員任期満了に伴い新しいクラス委員を選ぶための選挙（三・四年生）が二〇日から行われるが、その立候補者が六月十五日午後四時に〆切られた。それによると、経済学部・定員十九名に対し立候補者二三名、法学部・定員十名に対し二十名、社会学部・定員六名に対し七名、文学部・定員十名に対し二一名、尚、理学部は定員二に対し立候補者二名なので、そのままこの二名は選ばれる。

今度の級委員選挙の焦点は、現在の級委員会執行部（再建「全学連」派）に対して、反級委執行部派がどの程度くいこむか、という点にあると思われ、昨年の級委員の活動、例えば学食闘争や日韓、最近の原潜などをめぐって両派の対立は根深いものであり、選挙は反執行部派の勢力が比較的多い法学部（立候補者二〇人のうち一〇人が反執行部派）を中心に、かなりの激戦が予想される。

＜二面より＞

「もの」へのたちかえり

「彼は何となく肉感的であり、時に官能的でさえある」というロレンスの一見極めて唐突に思われる形容はそのことゝの係わり合いに於いて理解されるべきものなのだ。「神と人間との断絶」という観念も、それが林檎の様にみえるのではなく、林檎そのものと化するのでなければもはや何ものでもないといにうことロレンスは気付いていたのである。「セザンヌの様にみえる瞬間、もはやそれは何ものでもない」とは何と恐ろしい言葉だろう。「肉化」とは官能化でも「……の様に見える」ことでもなく、セザンヌのいう＜レアリザシオン＞のことであり、＜もの＞の本源にたちかえることであることが、ロレンスの此のさゝやかなセザンヌ論を通して明らかになるのである。

しかし此処で次の様な問題がまだ残るであろう。一つは、この「肉化」はロレンス独自のものではなく、旧約聖書以来の一つの表現のトポスではないかということ、もう一つはロレンスが果して彼自身の作品を林檎化し得たかどうかということ、さらにもう一つは、ニーチェが反観念論者となることによって逆に観念論者に変容したという運命を換言すれば、カへの意志を提示することによってプラトニズムを超克するのではなく、逆転させただけで終ったという運命をロレンスもまた荷なっているのではないかということである。ただ、此処で取り上げたセザンヌに関する言及を秘めた短い序文は、それが序文以外の何ものでもないということによって、よくこれ等の危惧の念を呼び起すことから免れ得ているといってよいであろう。

（筆者まえだまさひこ氏は、本学英米文学科助手）

▼M君、君があこがれていた大学に入学してハヤ三月が過ぎようとしている　そして大学生活はじめての二ヶ月もの夏休みを迎えようとしている君はこれらの大学生活において何を感じたであろうか。僕は君に、大学に入学するにあたって、本を読むことを勧めた。そして、君は今、確かに多くの量の、また、多くの種類の本を読んでいる。▼M君、しかし、はたしてこれだけで良いであろうか。僕達は本を読んだ結果、多くの知識を得、それによって自己の内面の充実（＝変革）を進める。だが、僕達はあらゆる矛盾の存在する社会を変えなければならない。その為に自己変革から一歩前進した社会変革、つまり、自己変革の過程を行為に表現しなければならない。▼M君、本（あらゆる種類の書物を含む）は人間の頭脳によって創造された産物である。僕達はこれら創造された産物と自分の身のまわりの現実とを冷静に見極め、そこに生まれる矛盾とを認識しなければならない。そして思索し、行動（実践）する一連の過程のあることをはっきり把握する必要があると思う。▼M君、僕達は常に問いかけねばならない。何のため？僕達は常にある現象を否定的にとらえて出発しなければならない。そこに、僕達の前進があり、発展がある。何のために読書し蓄積するか？読書する必然を感じ得るか？単に読書にふける閉鎖的な生活に安住しないでくれたまえ。▼M君、たとえば先日の野球の優勝の時を思い出してみたまえ。学生総数の約九割の応援動員は近年まれにみるものであった。彼らは優勝という可能性のもとに、応援という行為をした。しかし、彼らがその思索を大学内から社会へと視点を広げる時、僕は彼らの存在を肌で感じると思う。なぜなら、彼らが社会の矛盾を認識する時、僕との連帯意識がさらに強くなるから。▼M君、しかし、僕達が行動する時、自己をだましてはいけない。自己をだますことは行為そのものを無に帰属させる。僕達が意識し、その意識に忠実に行動に移行すること。これが、前に述べた一連の過程の中で重要である。そして、その意識の中に確固とした目的を持つということが必要になる。それが、僕達の行動をより有効にするであろう。▼M君、要するに僕は君に実践することの重要性をわかってもらいたい。極端に言うなら、たとえ思想は不完全でも実践してもらいたい。理論を完全に理解できる人間は数少ないのだから。僕達は行動そのものから何物かをつかみとる。前進し発展する。最後に君の健康を祈りながらペンを置きます。（文）

第9回　新聞学会賞

懸賞小説募集

立教大学新聞学会は例年の通り懸賞小説募集を左記の要領で行います。多数の応募を期待いたします。

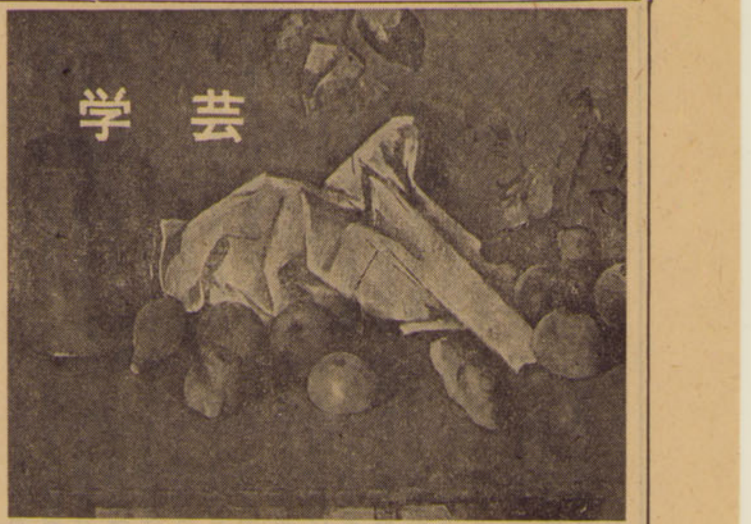
＝募集要項＝

一、字数　四〇〇字詰原稿用紙三〇枚前後　▼商業誌未発表の作品に限る
一、資格　大学学生（含、大学院学生）
一、締切　昭和四十一年九月三〇日　▼版権は本学会に所属する
一、発表　本紙・立教祭特集号
一、選考委員　小田切進・小松伸六・駒田信二・野口定男・福田宏年（敬称略・順不同）　▼ペンネームの使用は自由、但し本名所属学部学年・住所付記のこと
一、賞金　一等一篇一万円佳作数篇一千円

経済学界の権威・新鋭を総動員した、戦後はじめての本格的全集
経済学全集
全28巻　各巻別冊付
■編集＝遠藤湘吉・大河内一男・大塚久雄・熊谷尚夫
篠原三代平・出口勇蔵・名和統一・林栄夫・安井琢磨
＝この全集の特色＝
●現代の問題意識に立脚し世界的視野のもとに編集
●基礎理論から現状分析まで最高の学問レベルを平易・明快に記述
●執筆は経済学界の第一線で活躍中の百余名の学者
●各巻600枚の書き下し力作
●各巻に新鋭・碩学による最新の問題の書き下し別冊論文付
●巻末に経済用語解説・参考文献・索引を付す
筑摩書房　東京神田小川町2　詳細内容見本送呈
全巻内容
1経済学入門＝大河内一男／2社会思想史＝出口勇蔵／3経済学説史＝内田義彦・伊東光晴他／4マルクス経済学の理論構造＝武田隆夫／5近代経済学の理論構造＝安井琢磨・熊谷尚夫／6蓄積論＝置塩信雄／7恐慌論＝戸原四郎／8価格理論＝大石泰彦／9国民所得理論＝宮沢健一／10計量経済学＝内田忠夫／11西洋経済史＝大塚久雄他／12日本経済史＝山口和雄／13産業構造論＝篠原三代平／14現代企業論＝鎌倉昇／15農業経済論＝大内力他／16国際経済論＝名和統一／17金融論＝川口弘／18財政論＝林栄夫／19労働経済論＝隅谷三喜男／20現代資本主義論＝宮崎義一／21社会主義経済論＝岡稔・山内一男他／22福祉国家論＝小谷義次／23世界経済の再編成＝行沢健三・阿部統／24戦後日本の社会と経済＝遠藤湘吉／25戦後日本経済—成長と循環＝中村隆英／26地域開発の経済＝大来佐武郎他／27資本主義と技術＝林雄二郎／28統計日本経済＝相原茂他
菊判総クロス装函入・定価五九〇〜七〇〇円
第2回発売
現代企業論
菊判310頁函入　定価620円
鎌倉昇〈京都大学助教授〉
企業の行動様式を具体的・理論的に解明した新鋭学者の力作
〈別冊〉わが国における企業家活動の展開＝堀江保蔵〈京大教授〉
企業行動の計量分析＝福地崇生〈国際基督教大学教授〉
1回絶賛発売中
菊判300頁・上製函入・590円
経済学入門
大河内一男〈東京大学総長〉
■別冊　近代経済学とマルクス主義経済学＝末永隆甫〈大阪市立大学教授〉
第3回発売　7月13日
資本主義と技術
林雄二郎〈経企庁経済研究所所長〉　菊判・函入　予620円
■別冊　世界博覧会と技術進歩＝山崎俊雄
技術進歩の側面＝武藤正幸

中央公論社
東京・京橋2—1　振替・東京34
■詳細内容見本送呈
新しい時代のための「やさしく読める古典全集」！
世界の名著　全66巻
全知識家庭必備の教養全集
〈編集委員〉大河内一男　尾高邦雄　貝塚茂樹　串田孫一　田中美知太郎　手塚富雄　福原麟太郎　松田智雄　湯川秀樹　渡辺一夫
〈編集参与〉永井道雄
B6変型判函入／平均五四〇頁／原色口絵・図版多数
解説・年譜・索引・月報付
価各巻四八〇円〒50
第4回一斉発売中
52 レーニン
〈責任編集〉東大教授　江口朴郎
貧農に訴える　茨城大助教授　日南田静真　新訳
二つの戦術　福岡大助教授　西島有厚　新訳
帝国主義　東大講師　和田春樹　新訳
マルクス主義の戯画　横浜市大講師　相田重夫　新訳
国家と革命　東大助教授　菊地昌典　新訳
解説　レーニンと現代の課題（一二〇枚）　江口朴郎
付録　レーニンの新しい魅力（対談）　武田泰淳・江口朴郎
いかなる立場の人も、本巻に収めた五つの論文を読まずに世界変革の問題を語ることはできない。ロシア革命史専攻の気鋭の学究によるわが国初めての、正確で読みやすいレーニンの新訳を贈る。

二つの世界の思想的根源
松田道雄
地球は二つの世界にひき裂かれている。個人としてどのような生き方を選ぶにしても、この分裂とかかわらぬわけにはいかぬ。思考するすべての頭脳に、この分裂を意識せしめるにいたった思想的根源は、レーニンにあるといっても過言ではない。その思想に組みすると否とにかかわりなしに、レーニンを回避して二十一世紀の展望をもつことはできない。『二つの戦術』は、十九世紀にできあがったヨーロッパのデモクラシーに対する最も大胆な挑戦の書であり、『帝国主義』は、経済思想史の文脈においてよりも、戦争に対するプロレタリアの態度をロシア・マルクス主義の立場から理論化したものとして、政治思想史上画期的である。『国家と革命』は人民の創意への讃歌として、マルクス主義の「教義」のなかで異様な光彩を放っている。今回の中央公論社版の訳についていえば、現代日本のロシア研究の精鋭たちを動員しえた点で、いままでの最高のものである。
既刊　大増刷出来！
46 ニーチェ〈責任編集〉手塚富雄
名訳と諸紙絶讃の『ツァラトゥストラ』『悲劇の誕生』2作品を収める
3 孔子 孟子〈責任編集〉貝塚茂樹
碩学がその学殖と詩才を駆使した、現代人のための『論語』『孟子』！
6 プラトンI〈責任編集〉田中美知太郎
対話篇の迫力と古典美を徹底的な改新訳により初めて回復した決定訳
次回配本（第5回）6月20日
30 ルソー〈責任編集〉平岡昇
学問・芸術論　平岡昇新訳
人間不平等起原論　小林善彦新訳
社会契約論　井上幸治新訳
エミール　戸部松実新訳
『近代』はルソーとともにはじまる。自由・平等の近代市民誕生のために画期的な役割を果たした詩人思想家の精髄を収める



現在、私達の周囲をとりまく芸術は、高度に発達した資本主義のもとに、本来、「創造」者であるべきものが、「生産」者と化することにより、芸術の大量生産が行われ、私達の真の芸術への眼差は白濁し、斜視的傾向をおびつつある。そこで、私達の周囲にうずまく、この危機的状況を少しでも、克服するために、「ロレンスのセザンヌ論」を通して、芸術への一つの視点を論じていただいた。

——学芸部——

「もの」へのたちかえり

——ロレンスのセザンヌ論——

前田昌彦

「歌う」ということ

(一)

セザンヌのコンポジションをビザンチン・モザイクに比したT・E・ヒュームや、若き日のリルケのセザンヌ讃美はあまりにも有名であって、そのことに触れることさえ人をして躊躇せしむるのだが、ロレンスのさゝやかなセザンヌ論は、その文章を容易に見ることができるという事実にも拘らず、殆んど注目されていないように思われる。ヒューム、リルケ、ロレンスは互いに全くその資質を異とするが故に、たとえ各々がセザンヌという同一主題を扱っているとしても併置することは些か不適当であるという謗りを免かれ得ないであろう。しかしそれはあくまでも表面上の事柄であって、実際はそうではないということを『D・H・ロレンスの絵画』に付されたロレンス自身の序文によって吾々は認めなければならない。凡そ熱情と冷静さが相殺されることなく同時に共存することがあり得るとするならば、ロレンスとセザンヌという組み合わせの中にその最も顕著な例を見出すことができるといってもよい。このことに触れる前に吾々は少しく横道に迷い込んでみる必要がある。

神と人との非連続を主張し、ロマン派の自我主張、人神化を嫌悪したヒュームは、神と人との非連続の主張という点で、神学界に於けるカール・バルトに類似しているということに先ず着目したい。

しかしその時、バルトは単に意識の上で神と人との断絶を認めさえすればそれで事がすべて完了し、世界は救済されるということを考えているのではなく、それが行為となって肉化されることが本当の意味で神と人との断絶を認めたことになるのだと『モオツアルト論』の中で極めて婉曲に語っていることを吾々は看過してはならない。ヒュームの立場も実はそこまで行きつく筈であったのだが、それが暗示されないまゝで終ってしまったのであり、この様に考えてみればヒュームはバルトに含み込まれるものとすることができ、此処にバルト（『モオツアルト論』に於ける）、リルケ、ロレンスという一つの系列を作り上げることが可能になる。モオツアルトという軸、或いはセザンヌという軸を中心として語られることを極く簡単に、リルケ流にいってしまえば「もの」（Ding）の重要性ということである。「森羅万象はすべて＜もの＞であり、またあらゆる＜もの＞は行動し、その結果を生む」（『アポカリプス論』）という言葉はロレンスその人によって吐露されたものであるということに留意すれば、「もの」というヴィジョンによってこれ等三者は互に絡み合った存在であることが分るのである。

バルトは「神と人との無限の質的差異」という命題をキルケゴールにならって主張し、神と人との断絶に救いの橋を掛ける力はただ神からの垂直に降下するものとしてしかあり得ないと叫んだが故に偉大なのであろうか。これに感銘することは現代では極めて常識的なこととなっている。しかもそれは、例えばT・S・エリオットを危機意識の詩人とみなし、反ヒューマニズムというこれまた極めて常識化したパターンによって解釈することに辟易した魂にとっては耐え難いような一つの雛型へと固定化し尽したのである。たとえヒュームが、或いはバルトがそれを強調した時点においてそれが新鮮さを保ち、危機に瀕した時代を救済する考え方であったとしても、その精神がひとたび「神と人との断絶」という言葉に置きかえられるや否や、観念化という危険性をそれ自身が秘めていたということを見抜かなければならない。吾々はバルトをそういう言葉を吐いた人としてではなく、むしろその言葉が観念化される危険性を充分承知していた人として高く評価せねばならないのではなかろうか。神と人との断絶ということの小綺麗な絵模様は、水を含ませた筆のひと撫でによって拭い去られることを待ち望んでいるのだ。

「天使たちが神を讃美しようとして、バッハの音楽を奏するかどうか、これはどうも確信がもてない。……けれども彼等が相集ったときモオツアルトを奏し、そのとき神様もまたその楽の音を、ことのほか悦んで傾聴なさるだろうこと、これは確かだ」（小塩節氏訳）とバルトが彼のさゝやかな『モオツアルト論』の中でいっていることは、それがさゝやかであるが故に、彼の宗教論以上に彼のいわんとすることを一層明瞭に語っているように思われるのである。バッハは所謂宗教音楽というものを数多く作曲して神に捧げた成る程敬虔ではある。ところがバルトによればそのような姿勢は宗教というものゝ実体とは何ら係わりがないというのである。讃美歌を朝な夕な歌っていることが果して神の命令を全うすることかどうかということ、これは神に祈ることを否定することではなく、真の意味での神の讃美、真の意味での神への祈りとは何であるかということへの真摯な問い掛けなのである。バッハに比べればモオツアルトは表面的には信心深くはない。金銭目当てに幾度作曲したことか。嬉遊曲から鎮魂ミサ曲に至るまでその作品は数多くあるが、それ等は殆んど快活な、澄明な曲であって深刻さを帯びてはいない——快楽主義、悪魔主義というイメージはそういうところから生まれるだが彼は主義というもの、思想というものから遠く隔っていて、ただ音楽そのものであったのだ。勿論これはバルトのヴィジョンであって、バッハの音楽とモオツアルトの音楽の構造を音楽美学の立場から分析した場合には、このような安易な区分は危険であると見なされるであろう。だが、人はヴィジョンによって生きるのではあるまいか。バルトは此処でバッハとモオツアルトの相違を論理的に語っているのではなく、信仰というものゝ本質とは何であろうかと自らに問うているのである。それは信仰に於けるモオツアルトでありたいとの願いなのであり、信仰が「もの」と化すること、観念ではなく存在そのものに化することへの希求なのである。この事情を古代ペルシャの予言者は次の様に表現している。「ことばはすべて重い者たちのために作られたものではないか。軽やかな者にとってはことばはすべて虚言者なのではないか。歌え、もはや語るな」と。

リルケとの脈絡

(2)

このヴィジョンとロレンスのヴィジョンとの共通性を見るために、リルケとセザンヌの関係に触れることは、ロレンスのヴィジョンの立脚点そのものを説明することになるであろう。バルトがモオツアルトについて述べた時に強調している行為化ということは、ヒュームがセザンヌの中に抽象性を、ビザンチンの美術の中に精神性を見出し、そこに、オルテーガ流にいえば「芸術の非人間化」のしるしを求めたのとは凡そ対照的である。人間の邪悪さに対する幻滅意識と抽象芸術との関係が現代に於ける実感としての歴史体験によって前面に押し出されることは勿論必要であろうし、一つの考え方として認められるべきものであろうが、恐らくヒュームはこの抽象性を究極にまで押し進めていったならば、バルトのいうような肉化へと目を転ぜざるを得なかったのではなかろうか。『中心の喪失』の著者ハンス・ゼードルマイヤーは一九四八年にセザンヌこそ非人間的なものを氾濫させた張本人であると弾劾しているが、この言葉をヒュームに当てはめることもできるのである。一方セザンヌをゼードルマイヤーの様に批判するという形によって非人間化からの脱却を計ろうとするのでもなく、またヒュームの様に神と人間との非連続性の範例としてセザンヌを引き合いに出すのでもなく、セザンヌを全く別の観点から見ることによって全く別の映像を得ようとするものにリルケとロレンスがある。リルケはセザンヌの中に神と人間との断絶意識という教訓的宗教性を見ようとはしなかったらしい。リルケのセザンヌ体験は既にヘルマン・マイヤーの「リルケのセザンヌ体験」という論文によって語り尽くされてしまった感があるが、ロレンスのセザンヌ体験に先行する類似体験として取り上げてみたい。それにはクララ・リルケに宛てた一連の書簡に拠るのが最も都合がよい。

一九〇七年十月七日パリ第六区カセット街二九番地から、サロン・ドオトーヌで見たセザンヌの絵についてリルケは次の様な手紙をクララに送っている。「……セザンヌの部屋だけは別だった。現実のつよさは却ってセザンヌの作品の側にあるのだ。水ももらさず、かたく綿をつめたようなブルー。何のかげりもないグリーン。そして、セザンヌ独特の赤。葡萄酒の壜の例の濃い赤褐色。しかし、セザンヌのえがく対象は、なぜこう変に貧しいものばかりだろう。林檎といえばすべて料理用の、ありふれた安ものの品種だし、葡萄酒壜も誰かの古ぼけた上衣のよれよれのポケットからたったいま取り出したばかりというような、極めてつまらぬ壜でしかない……」（大山定一氏訳）。こう書いてリルケは人づきのよくないセザンヌの作品に些かとまどっているのだが、翌日彼は「セザンヌの果物は食べられるか食べられぬかという問題すら打ち消してしまった。ただ物体としての現実（レアリテ）に深まるのだ……」といい、さらに十月一八日に「セザンヌの仕事は、ごまかしようのない『存在物』を色彩の内実に集計することだ。セザンヌの『物』たちは、色彩のむこうで、古い記憶を延長するのではなく、あたらしい実存をはじめるのだった。人々がセザンヌの肖像画をみて不愉快な奇態なものしか感ぜぬのは、おそらくこの無際限な『即物性』の徹底からくる怪訝にちがいない」と記している。

ここで再びゼードルマイヤーの「＜ノイエ・ザッハリヒカイト＞という茶番劇」という言葉によって、このリルケの憧憬に挑戦することもできよう。しかし、抽象化ということは純粋性への志向であり、純粋性の探究は現代の病根であると見なすことが一つのビジョンであるとするならば、その逆もまた一つのビジョンであるといってもさしつかえあるまい。リルケはセザンヌのなんの変哲もてらいもない単純さによって強烈な印象を与えられた。セザンヌにはおよそ語るということがない。したたかな自我を見せようとはしない。『回想のセザンヌ』を書いたE・ベルナールによれば、セザンヌは賛美歌も儀式の華飾も気に入り、信徒として聖日には仕事をやめ、午後の礼拝にも参列するほどであったというが、セザンヌの絵には「宗教的」と称するものを一切拒否するものがある。ということは彼が宗教について語るということはいかに不毛であるかということを十分に心得ていたからであり、それゆえに林檎を、カルタする男たちを、サント・ビクトワールをただこちら側へ向かってやってくるものとして描いたのではなかろうか。天上的なるものではなく、地上的な「もの」として存在すること、具象化された行為そのものであること、これが彼の求めてやまなかったものではあるまいか。ある地点から最も遠く隔たっているものが、その地点に最も近いものではあるまいか。

ロレンスとフライ

(3)

非常に興味深いことには、このようなリルケのセザンヌ体験はロージャー・フライを通してロレンスに流れ込んでいるらしい。リルケとフライとの関係、あるいはフライとロレンスとの関係をつまびらかにすることは文献不足のためわれわれには不可能なことだが、ロレンスが一九二九年に書いた『D・H・ロレンスの絵画』への序文でフライの著書に言及していることによって、この推定がなされるわけである。この序文にはフライの者書からの引用が二個所あって、その引用文からフライの著書というのは『セザンヌの発展研究』（一九二七年）であるということが大体わかってくる。英国で最初のセザンヌ展が開催されたのは一九一〇年、グラフトン画廊においてであったが、それから十年後、即ち一九二〇年にフライは『ビジョンとデザイン』を著し、その中でもセザンヌに触れているが、それはヴォラールの書いた『ポール・セザンヌ』（一九一九年）の書評に過ぎず、ロレンスが読んだのはおそらく、『セザンヌの発展研究』のほうであったと思われる。たとえば、「セザンヌはティントレットー風に、何か堂々としていて、官能的で、肉感的に満足すべきものを作り上げたいと熱望していた。フライはこれを彼の＜執念＞とよんでいるが、これはなかなか穿った言葉だ。だが同時にフライはそれを＜謙譲さ＞ともよんでいるが、これには首肯できない」というロレンスの言葉はフライの次の文章に由来するものであろう。「セザンヌは＜謙譲さ＞という教訓を完全に学びとったのであった。そして彼の傑作の中で最も魅力的な要素は華麗さや自意識を否定し尽くすことによる極度の＜謙譲さ＞である」

この様にフライからセザンヌを学んだと思われるロレンスはセザンヌという画家を通して己れ自らの姿を浮び上がらせるのである。フライがセザンヌを思想ではなく、デザインによって生きる画家を規定し、純粋に構造への志向を押し進めた者としたことは、ロレンスのセザンヌに対する基本的態度に影響し、同時にフライはロレンスを極度に異常な方向へと導き込まない制動機として働いていて有体にいえば、ロレンスのセザンヌに対するヴィジョンはフライのそれと重なり合うとさえ考えられるのである。あまりにも重なり合い過ぎているので、フライの考え方は誤っているというように思わせる独特のポーズをロレンスが作っているところさえある。例えば、「類稀な資質を持ちながら、セザンヌは製図に関しての比較的普通の才能、つまり製図家が商業デザイン学校で身につける才能さえ持ち合わせていなかった」というフライの言葉を取り上げて、「この言葉は現代批評の空虚さを自ら暴露している。大体＜才能＞というものをそんなところで身につけられる筈がない」とロレンスはいっているが、フライはセザンヌに製図の才能がなかったことが却って幸いしたといいたかったのである。にも拘らずロレンスはそれを部分的に取り上げて反論している訳だが、これは遂に彼がフライから多くを得ていることの証左でもあるといえるであろう。

ロレンスの実作を読むものは、彼がセザンヌを高く評価し、マチスやヴラマンクなどの所謂野獣派と一般に呼び慣わされている人々を嫌悪するのに意外さを感じせさるを得まいが、ロレンスに拠ればマチスやヴラマンクはすべて＜精神的利己主義者＞であり、単なる影に過ぎず、たとえ面白いものであろうとも、彼等の作品はすべて墓地の中で屍体と精神的人間によって行われる遊戯同然であり、これに反して、セザンヌは精神などというものに対しては侮蔑の目を向けることさえ潔しとしなかったという。極めてリルケ的、またフイ的なロレンスのセザンヌ論はまた彼の他のすべての小説、詩、紀行文、随想に共通するものを含んでいる。それでは何故この序文を特に取り上げねばならないかといえば、ロレンスの名付け難い力への志向というものが、丁度ルソーの自然復帰論が一つの仮面であったのと同様に、一つの仮面であることを知るために好都合だからなのである。即ちセザンヌを通してロレンスのリルケへの脈絡を辿ることができ、さらにそれが先に挙げた『モオツアルト論』の著者にまで繋がるということが分ってくるからであり、そのことによってロレンスの仮面の裏側にある実相を垣間見ることが容易になるからなのである。

「林檎になれ」とは

(4)

ロレンスに拠ればセザンスに於いて近代フランス絵画は真の実体へ、ものとしての実体へ初めて復帰し得たのであるという。ゴッホの資質はまだまだ主観的なものであって、彼自身が作品に投影されているが、セザンヌの林檎は個人的感情でそれを変形されることなく、林檎をそれ自体で完全に存在するようにさせる真の試みから生まれ出ている。セザンヌは、いわば、己れ自から林檎を引き離し、それ自身で存在するようにさせることに力を注いでいるのである。このことは一見容易なことの様に思われるけれども、これまで幾千年もの間、「もの」が真に存在するということを認めるために作り上げられた最初のしるしなのであり、全く奇異なことだが、実に人間の堕落以来、人々は「もの」の存在（the existence of matter）の否定と、「もの」は精神の一形式であるということの証明に専念してきたのである。セザンヌは絵画に於いてこのことに思い至った。突然彼は精神の横暴さ、精神の、自意識の、閉じ込められた自我の白い尊大さを、この青白い牢獄の存在を感知し、その時から大きな葛藤が心の中で渦巻き始める。古い精神の自意識に縛られていたところからの脱出を願い、また突然「もの」の存在そのものを表現したいという衝動に駆られる。彼は肉体の真の存在（the real existence of the body）を描こうと欲したのではあったが、しばし頓挫の憂き目に会う。何故なら彼もまた吾々の大部分の者と同様に精神的人間であり、直観的肉体になり切れなかったからである。彼は先ず単なる虚仮威しや傲慢さによって脱却を試みてはみたが、それも失敗に終っている。肉体をもった人間（the man of flesh）は数世紀もの間に徐々に崩壊し、精神的人間、自意識をもった自我にその席を譲ってしまったが、セザンヌは彼の芸術家としての魂によってそのことを察知し、肉によって立ち上がることを希求したのであり、挫折による苦い経験を得たけれども、林檎によって遂に墓の扉から石を押し除けることが出来たのである。彼がモデルに向って「林檎になれ！林檎になれ！」（Be an apple! Be an apple!）という時、ジェスイット教徒やキリスト教観念論者の崩壊ばかりか、意識の全形式の崩壊を予告しているのであり、もし人間が林檎になるとすれば、人間は新しい世界を、沈黙した世界を獲得し、静かに座し、肉体的に（physically）のみ存在し且つ非精神的である人間に変容するであろう。セザンヌが「林檎になれ」というのはそういう意味においてである。だがモデルが自分の個性と精神を持ち出してくるや否や、それは紋切り型のものとなり、それを画家は無理にも描かねばならなくなる。モデルの陳腐でないところは、その林檎たること（appleyness）にある。ただ林檎であれ、そして思想や感情や、個性をすべて放擲せよところでセザンヌが紋切り型のものから抜け出し、実際のものに直観的解釈を与えているのは静物の場合であって、これ等は純粋な意味でセザンヌの代表的且つ生に対して真なるものである。此処に於いてセザンヌはものをリアルなものとなし、幾つかの林檎と湯わかしの豊かな直観的ヴィジョンを吾吾に与えることによって己れの欲したことを成し遂げ得たのだが、此処まで来ると彼の手法は逆に他人に模倣されるものとなる。人はテーブル掛けや林檎を真似てはみるが、それはセザンヌ独特の湯わかしや林檎とはならない。各人はそれを自分なりに新しく違った風に作り上げねばならないのだ。新しく、また違った風に。「セザンヌの様にみえる瞬間、もはやそれは何ものでもない」（The moment it looks 'like' Cezanne, it is nothing）……

繰り返しの多いロレンスのセザンヌ論を以上の様に摘要し、フライのセザンヌ論『セザンヌの発展研究』を再び手に取ってみると全く同じ個所があることに吾々は気づくのである。

ロレンスのいっている＜appleyness＞という言葉はフライの次の説明から出ているのだろう。「セザンヌは、モデルたちにさせたのと同様、＜林檎の様に＞自分をモデルとして揃えている。彼は丁度台所のテーブルの上にある林檎に対するのと同様に自分の頭を適確に見て取る。」さらに「ものをリアルなものとなす」というロレンスの言葉はまたフライの次の言葉、「セザンヌは己れの目的を決して疑わなかった。彼の方向は決まっていて、表象というヴェールの裏側に隠されているリアリティーを、即ち彼が引き出し、明らかにせねばならぬこのリアリティーを、必死に求めることによって＜現実化＞しなければならなかった。」に拠っているといえるであろう。

「もの」の幻視者

(5)

「もの」それ自体であれという考え方をセザンヌに関してはロレンスはフライから得ているが、セザンヌ自身どこかで＜realization＞という言葉を使っていたと思われるし、リルケもセザンヌに暗示を受けて＜Dingwerdung＞という言葉を造語している。とすればロレンスの＜appleyness＞はフライの＜real＞に、セザンヌの＜realization＞に、リルケの＜Dingwerdung＞に該当することになり、さらにロレンスのセザンヌ論に於いて matter、body、flesh、appleyness が同義語として使用されていることを知ってみれば、ロレンスの「肉体」の狙いは林檎となることの仮面であるということが出来るであろう。セザンヌに対する

＜一面へ続く＞

焦点

原潜闘争の問題点

ベトナム戦争がますます激化・拡大されているなかで、五月三〇日、過去八回の佐世保寄港を既成事実として、いよいよ米原子力潜水艦が日本のド真中横須賀へ入港してきた。このことは日本帝国主義の核武装化の方向が巨大な一歩を進めたことを示している。一昨年の佐世保初入港以来、原潜阻止闘争は、社共両党、総評などの労組、学生を中心に展開されていながら今日、ついに横須賀入港を許してしまったことはとりもなおさず、そうした阻止闘争の脆弱性を露呈したことに他ならない。何故に原潜の横須賀入港を阻止できなかったのか。阻止闘争の問題点を探ることを通じてそこから教訓を導き出し、七月上旬に予定されている原子力空母エンタプライズ号の横須賀入港阻止への闘いを再組織していかねばならない。

原潜寄港の現在的意味は一九六〇年安保条約で体制的地がためを強行した日本資本主義が開放経済体制に移行して、欧米帝国主義列強との国際市場争奪戦に本格的に乗り出し、昨年の日韓条約を一つの大きなメルクマールとして、資本主義の最も弱い輪の一つである韓国をはじめとして、今年四月のアジア閣僚会議招請にみられるごとく、アジア外交・経済援助という美名のもと、日本独占資本が東南アジアへの帝国主義的海外進出を積極的に開始したということに見合って一方で安保条約に自ら積極的に入り込みつつ米原潜の寄港を、これらアジアへの進出と、そこにおける日帝が盟主になっての経済圏の確立のための軍事的裏づけに利用し、また他方、国内におけるブルジョア支配体制の強化、即ち労働者・学生に対する攻撃、合理化＝首切り、労働強化、大学支配を企図しつつ、「核兵器は持ち込まない」と口で言いながら、実質的に日帝の核武装化をねらうものである。

こうした原潜の寄港をめぐって、労働者・学生の間に寄港阻止闘争が組まれてきたが、佐世保・横須賀入港を許してしまった根拠はどこにあるのか。原潜寄港に対しては、即自的な安全性感情、ベトナム戦争が激化しているおりから戦争にまきこまれるという危機感中国核実験による核に対する恐怖感などから一定の高揚を示している。だがしかし、日本政府は唯一の被爆体験をもつ日本国民のこうした核アレルギーを、過去八回の佐世保寄港によって原潜による放射能廃棄物などによる安全性は全く心配がないとして、原潜寄港の本質をあたかも原子炉の安全性にのみあるかの如く宣伝し、そのウラで自らの帝国主義的野望を着々と実現しようとしているのだ。政府のふりまく安全性論議への傾斜こそ、原潜寄港の階級的な本質を陰蔽しそれ故に「原子炉の安全性は原子力委員会の見解から保障されており、佐世保への八回の寄港でも何ら危険は生じなかった」という政府の宣伝に対決しえないのであり、逆に東南アジアをめぐるベトナム戦争や中国の核実験という〝戦争の危険性〟を最大限利用しつつ原潜、原子力艦隊の日本寄港は「日本の抑止力として働くだろう」と語らしめるのである。

社会党は原潜の本質を「安全性」に帰着させ、そこからそうした労働者の安全性感情による一定程度の決起にズブズブに乗っかった地点から反対闘争を展開している。だが、前に述べたように政府の設定した「安全性」論議というそのワク内で反対闘争をくむということは、中国の核実験などを口実として日本自らの軍事力増強（三次防計画をみよ）や核武装化の方向性を大胆に追求しつつある政府ブルジョアジーの真の目論みを何ら見破れないばかりかそれゆえに原潜寄港の本質を労働者の前にあばき出すことができず労働者の中に満固とした闘いの基盤を構築しえないのだ。このような社会党の安全性論議への傾斜は彼らのとなえる積極中立外交や国会における三分の一の勢力を確保しようとする、議会主義へののめりこみから生じたものでありそれ故に反対闘争に立ち上った労働者、学生の闘いを自らの国会での政府との対決の道具にする運動となってあらわれるのである。

他方共産党は今回の原潜寄港を「日本人民の独立と平和の願いに対するきわめて重大な挑戦」である、と受けとめつつ日本がアメリカのベトナム戦争に加担し「日本国土と人民をアメリカ帝国主権の侵略計画にいっそう深くひきこもうとしている」として原潜を日本の核基地化としてとらえることによって、反米闘争を組織せんとしている。だがしかし原潜闘争（にかぎらず）を米帝と日本民族の矛盾という観点からとらえようとするところからは、明らかに反米民族路線が導き出され、そのような視点からは原潜の階級的分析と労働者の闘う基盤は築けないし、また近年の大国主権的イデオロギー（ブルジョア・ナショナリズム）の国民への注入という支配階級のイデオロギー攻勢の意味は決して見ぬけないのだ。

かかる社共による原潜闘争の議会主義的、民族主義的歪曲を乗りこえたところに、このような既成左翼による反対「運動」を告発しつつ、原潜闘争を再組織していくことが急務である。

権威ある図書で現代的教養を！

有信堂　■目録進呈■
代表的好評教養書
立大教授 宮沢俊義著　各国憲法のはなし　二八〇円
清宮四郎・柳瀬良幹編　憲法・行政法小事典　四五〇円
京大教授 大隅健一郎編　法学・現代生活と法律　九〇〇円
東大教授 伊藤正己著　近代法の常識　四〇〇円
東大総長 大河内一男著　社会政策講義Ⅰ～Ⅱ　各四〇〇円
東大教授 隅谷三喜男著　日本労働運動史　九〇〇円
早大教授 町田実他著　経済学入門　四八〇円
京大助教授 菱山泉著　近代経済学の歴史　五五〇円
東大教授 岩崎武雄著　哲学入門　五〇〇円
東大教授 林健太郎著　歴史と政治　五〇〇円
慶大教授 白井浩司著　入門フランス文学史　四二〇円
静大教授 三枝康高著　現代史のなかの作家たち　六八〇円
■好評の最新刊■
ケースブック 続・行政法　最高裁判事 田中二郎編　A5・上製函入 定価一二〇〇円
好評ケースブック・行政法の続編として、最近迄の行政事件最高裁判例約三五〇を適切に選択し、体系的にまとめあげ、判例批評、参照条文等を附した法学部学生必備の判例集大成。
慶大教授 沢田允茂著　哲学の基礎　五〇〇円
従来の哲学書と異なる厳密な科学的、論理的な哲学への導入を行なう現代哲学への入門書
田中誠二・並木俊守著　例解商法（上）（下）　（上）九〇〇円 （下）七五〇円
あらゆる商法予想問題の模範解答を示し、斯法の理論と実際を習熟せしめる最新の参考書
●東京 文京 本郷5－30 振替東京141750●

大学生の就職案内　受験新報臨時増刊
好評発売中！ 価二五〇円
正直の道…………永田菊四郎
就職する大学生諸君へ……新井巌
職業と適性…………井坂正
座談会 これからの企業が望む人物
わが国産業界の動向をさぐる
■就職難時代における試験突破の方法・秘訣を紹介
就職戦線突破の心得
本年度各社採用計画　採用予定人員 試験時期
各社採用条件の分析・各社推せん依頼大学一覧・各社待遇一覧（初任給・中小五年目の給与、ボーナス、諸手当）・企業はあなたを待っている・女子大学生の就職現況・人事課日誌その他満載
筆記試験の合格対策・公務員への道
こうすれば面接試験は突破できる
座談会 先輩の生活と意見
—就職・公務員試験準備書—
大学生の就職必携　390円
5000題からの精選解答
会社案内、各業界の展望、採用方針、初任給、採用状況、41年度出題問題と全問題解答付、大学生用就職準備書として他に類のない最新の問題のみを収録した決定版。
国家公務員 上級試験必携（行政・法律 経済篇）　360円
受験案内、最新出題問題と解答、出題傾向と対策、合格記、合格者の行方、競争率などあらゆる事項を収録した最新決定版。
ぜひ知っておきたい 時事用語解説　400円
就職試験に出題される時事・常識用語の解答は本書で完璧。
法律・経済辞典　—就職用語準備に最適—　320円
東京都文京区高田豊川町60　法学書院　振替東京81699

好評基本図書
上智大学教授 伊藤勲著　近代政治学の基本問題 増訂版　A5判1000円
早稲田大学教授 小林昭三著　ワイマール大統領論研究序説　A5判600円
早稲田大学・中央大学講師 入江啓四郎／早稲田大学助教授 大畑篤四郎 共著　外交史提要　A5判680円
愛知学院大学教授 板橋郁夫／愛知学院大学助教授 善家幸敏 共著　法学 三訂版　A5判850円
早稲田大学教授 法博 大野實雄著　企業および経営の法学　A5判1600円
中央大学教授 法博 下村康正著　犯罪論の基本的思想　A5判 600円
続犯罪論の基本的思想　650円
名古屋大学教授 法博 大塚仁／学習院大学教授 法博 香川達夫 共著　教材刑事学　A5判850円
早稲田大学・中央大学講師 入江啓四郎著　国際法解義　A5判850円
愛知学院大学教授 商博 末高信著　改訂 生命保険論　B6判500円
亜細亜大学会計学研究室編　会計・経営 諸則便覧　B6判650円
早稲田大学法学部法職課程教室編　司法試験 短答式練習問題集　B6判450円
成文堂　東京・新宿・早稲田鶴巻町441 振替東京93491 TEL(202)7489

現代日本資本主義講座〔全3巻〕
井汲卓一・今井則義・長洲一二＝編
各巻価八六〇円
日本資本主義の戦後二〇年にわたるめざましい高度成長は、どのような経済構造の変化と新しい特徴をもつにいたったか。本講座は、現段階における政治と経済の両面から日本資本主義の総括的動態分析を行ない、革新の対応の方向を示唆した労作
第1巻／動態と構造　第二次大戦後の日本資本主義／産業構造／農業構造／経済成長と雇用構造／金融と財政／利潤率の低下／国有企業問題／地域開発政策
第2巻／政策と運動　経済制度と経済政策／企業集団／経営者社会／政党・官僚・財界／新産業体制／転換期の労働運動／平和運動／戦後階級構成の変動
第3巻／日本と世界　世界市場の再編と日本／世界帝国主義の政治動向／開放体制・自由化／IMF体制／南北問題／景気循環／移行期の日本帝国主義／他
日本評論社　東京新宿須賀町／振替東京16

新法学案内
ジュリスト 臨時増刊 三八〇円
法学ガイダンスの決定版
■これから法律学の勉強をはじめようとする学生―特に法学部の専門課程に進学しまたは進学しようとする学生にとって、法律学の各分野への道しるべとなるよう、第一線の学者が執筆にあたった絶好の案内書。法律学への興味を呼びおこし専門分野選択の指針となる学生必読の書
座談会 新しい法学教育と法律学の学び方
星野英一／田中英夫／竹内昭夫／藤木英雄／金子宏／新堂幸司
各科目の学び方と文献案内
◇憲法／佐藤功◇行政法／山田幸男◇民法／高梨公之◇商法／服部栄三◇民事訴訟法／中野貞一郎◇刑法／西原春夫◇刑事訴訟法／田宮裕◇労働法／蓼沼謙一◇経済法／正田彬◇国際法／波多野里望◇国際私法／山田鐐一◇法哲学／井上茂◇法制史／平松義郎◇英米法／田中英夫◇独法／山田晟◇仏法／高橋康之
法学部新入学生に望む 専門課程に進学する学生に与う
有斐閣　東京神田神保町2—17